11号（1979.10）

巻頭言

発足以来三年も半ばが過ぎ、本年は新たに夏期石仏講座などの事業もひとまず成功の裡に終了し、安定した会活動が行なわれるに至ったことはうれしいことである。しかし、それだけにまた多くの課題をかかえこむことにもなり、安定した活動が同時にマンネリズムの傾向を持つに至って来たことも、傾向として否定できないことであろう。ここで大事なことは、どこまで会員全体の意志が会活動に、ふさわしく反映された生き生きした姿になっているかということである。

来る十月二十日、埼玉県飯能において開かれる第三回総会は、こうした基本的姿勢から協会活動を再点検し、新たな意気ごみで協会の発展の第二段階を期したいと思う。

私たちは今春から今夏を通じて、協会活動の体制づくりのため、かねて懸案であった常任理事会をまず発足させ、会計幹事に加えて幹事の増員なども行ない、実際的な活動の母体を整備するように努めてきた。

九月五日には、第二回常任理事会を招集し、第三回総会に向けて来年度の事業計画と合せ、提議すべき諸問題を討議した。そこで論議された諸問題を来年度の事業計画と合せつつ、以下に重要な部分のみを列記し、会員各位の認識を得たいと思う。会員各位にはこれらの問題を検討され、総会に積極的に参加されるか、文面にても意見提案をできるだけお願いしたいと思う次第です。

㈠機関誌「日本の石仏」の編集体制について。

機関誌は会員の自由な投稿の場でありますが、そうはいっても、それには、会員・読者が読むに価する編集内容のものであるというコモンセンス（常識—共通感覚）が前提とされます。このコモンセンスは機関誌の号を重ねるにしたがっておのずと成育するものですから無理な基準づくりは編集陣の恣意性を多く招き、問題を生じましょうが、一方無制限な投稿の掲載は会員全体の希望する編集におけるコモンセンスや理念に障害をきたします。石仏研究の雑誌として理念をくみこんだ編集のコモンセンス（共通感覚）を生み出すものは、錯誤を含んだ永い時間の経験の他ありません。これまでの十号にわたる機関誌の経験を経て、私たちは、編集の方向づけについても意識的なコモンセンスの形成を目途とした第二段階に達したと考えます。そこで、今後は、読者の批判を受けつつ編集し、基準を明瞭に立てて活動する「編集委員会」を設置し、編集委員会の判断にもとづいて機関誌の内容を決定してゆく体制を従来以上にはっきりとさせたいと思う。

㈡機関誌「日本の石仏」の内容について。

現在、会員の寄稿の状態はかなり多く、ものによって長期間ねかせていただいている場合もあります。これは、特集との関係なども勘案して行なわれているのですが、一方、特集の記事なども合せて、質的にはまだまだ十分な機関誌としての成熟を示しているかというと問題であろう。年四回の発行のうち、二回は特集とし、あとの二回は投稿などによる自由な編集とするという方針は今後も踏襲したいが、特集については、相当に早くから予告をし、充実した寄稿者をこれまでより一層幅広く求めるよう努めたい。来年度の特集としては、「聖（ひじり）と石仏」（三月）、「庚申年」（九月）の二つのテーマを原案として考えている。なお、夏期石仏講座のテーマを土台として、これを別冊特集号として発行するなどの案も討議されている。

また機関誌の毎号定期の欄のうち、検討すべき欄として、「問題の石仏」の欄が討議された。「問題の石仏」欄は当初予期されたような会員相互の対話の場としての機能を果していないとの意見が強く、もっと会員相互の意見の場を幅広く拡大して設定する必要があるとの結論に達した。来年度からは「会員読者欄」といったものを設定し、編集のあり方から石仏全般のこと、会員相互のことなど、自由な投稿を盛りこめるものとしたい考えである。

㈢石仏調査旅行会について。

隔月行なっている石仏調査旅行については、いままでのところさしたる問題はないが、参加者の定着と希望者の増勢につれて、一回ごとの定員をどれだけにするかが問題となっている。七月の「熊谷の石仏」日帰り旅行は、久しぶりの日帰りとあって希望者が六十名を越え、大型バスいっぱいとなった。日頃参加しない人の多かったことから、ぎりぎりに詰めこむ形となったが見学会としては多すぎる混雑状態となり、疑問であるとの声も一部会員から寄せられた。今後はこうした点の配慮、解決策が求められよう。

来年度の旅行会の原案としては、千葉の石仏（一月）、佐渡の石仏（三月）、鹿児島の田ノ神像（五月）、越中・能登の石仏（七月）、越後の石仏（九月）、群馬の石仏（十一月）が計画されている。なお、来年秋の第四回総会は、本年秋の千葉県支部の発足に従って千葉県支部に依嘱され、総会翌日の日帰り旅行も別個に行なわれる手はずである。

㈣第二回夏期石仏講座の実施について。

第一回夏期石仏講座はほぼ予定通りの成果を期し、成功裡に終了したが、はじめての協会独自事業ということもあり、かなりの試行錯誤もみられた。講座のコース毎に取ったアンケートをみても、内容について難しいものがあり、全体として講義内容のバランスがとれていない、もう少しやさしくしてほしいとの意見がある一方、もっと深く狭くつっこんだ内容がほしいとの意見もあった。講師陣の見解はそのまま見解として尊重されるべきとしても、全体としてのバランス、聴講者の水準などがコースのあり方として明確になっていなかったことは事実と思われる。

そこで本年度の計画は、(1)一般コース、専門コースを講義の程度によって明瞭にわける。(2)各コースとも一〇〇人程度の定員に増やし、会員以外の一般にも広く参加を呼びかける（第一回の講座は一般の参加を広告する以前に、ほぼ定員に達してしまった）。(3)講義と講師については、広さと深さを考慮するために、三年間で一回転する程度の連続的な内容も考慮する。講座の概要は早急に決定し、早目に発表する、などの骨子が討議された。なお、夏期石仏講座のみでなく、一人の研究者の研究

内容を徹底して聞き討議するような小人数の集まり、研究発表会のような集まりなどが会員の自主性においてなされ、そのような活動の機会を、協会が補佐することの必要性といった意見も提出された。

㈤会則の変更について。

昨年秋の第二回総会において、会費値上げの会則変更が決定され、協会独自活動の計画が立てられた。それに従って、夏期石仏講座の実施と会員名簿の作製が協会独自の仕事として実行されて来たわけだが、これは、協会会則第五条「機関誌の発行並びに本部にておこなう諸事業は木耳社に依嘱する」に違うことになり、追認の形となりますが、今秋の総会においてこの会則の変更を行なうことが必要となる。よって、この第五条を次のように変更する原案が立てられた。

「第五条の一　機関誌の発行・石仏調査旅行は、木耳社にこれを依嘱する。

第五条の二　本部にて行なう諸事業のうち協会と木耳社が相互に適当と認めたものは、木耳社にこれを依嘱する。」

これによって、協会事業のうち、機関誌発行と石仏調査旅行は従来通りこれを木耳社に依嘱し、それ以外に必要に応じて木耳社と相談し、依嘱すべきものは依嘱するという形をとることとなる。基本的には、右二つの事業以外は順次協会独自の活動体制において実施する体制をとることが討議された。

協会会則については、第五条以外についても疑問が提出されたが、自由な在野研究団体としての「会則」は、出来得れば全くないにこしたことはない、会則などない方が良いのだとの原則に立ちつつ、どうしても規定する必要のあるところを会則としておけばよいとの大勢の意見となった。

13号(1980.4)

巻頭言

日本石仏協会も発会以来満三年を経過し、いよいよ四年目を迎えることになった。発会に先立って志を同じくする者が発起人となって、何回か集まって、どういう性格の会をつくるか、会の名称を何とするかについて充分に論議を尽した。

当時、京都を中心に故川勝政太郎博士の主宰する『史迹と美術』誌が、昭和五年発刊以来半世紀にわたり四〇〇号というすばらしい業績を続け、また東京に於ては「庚申懇話会」が、昭和三十三年以来、月刊誌『庚申』を刊行され、その他地域的な石仏研究団体も幾つかあった。

しかしながら『史迹と美術』は主に中世以前を対象とされ、『庚申』はその名のごとく庚申研究が主であり、京都を中心により広範囲な愛好者の結集を試みた「日本石仏の会」の『随筆四季』は五号以降は送られてこなくなった。発起人の中には遠く九州や山陽・東北の人々もあったが、大方は近世以降の民間信仰の石仏研究を主とする人々であったが、努めて中世以前の石仏研究も、近世以降の石仏と同様に重きをおくこと、全国組織として地域的片寄りを防ぐこと、初心者より専門家まで幅広い層を対象とすること、三年以内に概ね一千名の会員を募ることという、思いきった門戸開放策を掲げた。殊に、既存の石仏研究団体と友好的に互いに密接な関係を保つために、名称も「日本石仏協会」と定めた。

このような基本方針を立てることに、発起人の間に抵抗はなかったが、これが運営にはかなりの困難が予想された。三年を

経過した今日、一千名の会員はほぼ達成され、他の基本方針も逐次充足されつつあると信じているが、会員の地域的片寄りは、遺憾ながらなお程遠しであり、今後の一層の努力の必要が痛感される。

それにも増して、今日に到っていよいよ問題になることは、既に開かれた三回の総会、並びに隔月の石仏旅行会に於て、それぞれ集まる者は全会員の一割以内ではあるが、会の方向づけ、なかんづく機関誌『日本の石仏』について、かなり見解の相異がみられることである。多くの意見が積極的に会員から出ることは最も望ましいことではあるが、「十人十色」という諺の通り、その悉くの意見を充足することの不可能なことは論をまたないところである。それとともにあまりに右顧左眄に過ぎて、会の性格に一貫性を欠き、あるいは無性格になることは、最も懼れなければならないことである。

それぞれの団体には、団体独自の性格があり、思想がなければ、それは単に数の寄り集まりであり、いかに優れた会員が揃っていても、世に言う「烏合の衆」のそしりを免れない。発起人を始め、逐次理事も専門性と地域性を勘案して委嘱し、三二人に及んでおり、監事・幹事を加えると三七人になり、極力会員各位の声を反映することに努め、さらに群馬・埼玉・千葉の三支部は、支部会員の意見を詳細に本部に伝えられている。将来理事の選出も、日本民俗学会のように選挙によることが望ましいと考えるが、そのための経費その他からまだ時機尚早であろう。『日本の石仏』第13号より『会員の声』の欄を、第三回総会の決議に基づき新設したので、隔意ない建設的なご意見をお願いしたい。しかし究極的に会の理念・方向に賛同出来ない方とは、遺憾ながら袂を分つしかない。『日本の石仏』の編集委員会も、本年二月二日に発足したので、より会員各位のご意見も強く反映できるものと確信している。

なお協会の石仏旅行も、木耳社の社長であり本会の副会長でもある田中嘉次氏より、協会に移譲するとの申し出があり、二月二日の理事会でこれを了承したので、秋の総会の会則変更まで、七月の旅行より暫定的に協会で主催することを、変則ながらご承知の上、ご協力を願う次第である。

（大護記）

14号(1980.7)

巻頭言

「歌は世につれ、世は歌につれ」という。それを充てはめるにはおかしいようにも思われるが、石仏研究と石仏出版の関係にも、そんな関係がありそうに思われる。

近年益々石仏に関する図書、一般の雑誌の石仏特集、美術関係のシリーズものの一冊としての石仏、さらには地方新聞の文化欄の連載が目立って多くなってきたことは、決して石仏研究を志すものの贔負目ばかりではあるまい。その背景には、いわゆる「石仏人口」の急激な増加があってのことであり、出版関係者からいえば、売れるから出すことは明らかである。こうした趨勢は、市町村史の中の一冊として石仏を加えざるを得ないところにも反映されている。

全国の数多くの石仏研究家の多くは、自分の本を世に出したく思っているのも、こうした大勢からはもっとものことである。著者の側からいっても、出版したからには売れなければ困るのは出版社と同様である。そこで出版を希望する人々は、当然近年の類本に目を通すことになる。その結果は似たような石仏の本が書架に所狭しとばかり並ぶことになる。但し石仏の本の場合、普通の販売方法では再版を含めて精々三、四千部が限度で、出ると短期間に勝負するので、書店の書架に並んでいるものは極めてすくない。また買う側からいっても類本を徒らに多く集めても仕方がないということになる。

類本の最も多いものは、「何々地方の石仏」といったもので、これからの自分の調査行の目安に買っておくといったものである。その次に多いのは著者が主観的に捉えた各地の多彩な石仏であって、筆の立つ人はその主観的・文学的著述で、結構人々を楽しませうるのがこの類である。こうした出版界の流れが、これから自分の著書を世に送ろうとする人々の態度をかなりにまで左右しているように思われる。これは石仏を指向する人々の現在の平均値がこれに近いということをも意味しよう。

しかしそろそろ流れを変えて、もっと広い日本的な視点に立って、例えば道祖神とか庚申塔とか、馬頭観世音・弁財天・不動明王、さらには板碑とか石造塔等々の各々について突っこんだ考察をしたものが、次々と世に出て欲しいものである。どこにどんな多彩な石仏があるということの次には、全国的な視野に立ってそれらの各々がどのような傾向にあり、その様式の伝播や信仰の実態、その基本的な意味がどこにあるかを知ろうとするのが当然の流れとならなければならない。それを知りたがっている人々の多くなりつつあることは、明らかである。ただそれをみたしてくれる著述がほとんどなされていないために、相変らず地方地方の石仏紹介の図書に手を出しているだけのことなのである。

勿論全国の石仏の絶対量は厖大なものであって、道祖神・馬頭・庚申等々、その一つ一つ例をとってみても、一生を費しても一人でその大半を見ることは不可能である。しかし徒らに数を見ることが能ではあるまい。アルバムの冊数の増えることをもって満足するのは、趣味としては結構であるが、研究の態度としてはそれに終始してはどうにもなるまい。

そろそろ石仏を指向する人々の中から、問題意識と方法論を充分に確立して、無駄のない調査研究に進む者が、もっと、もっと多く出てこなければならないように思う。出版社の方でも、こうした趨勢を踏まえて、日本の石仏研究が次の躍進をなし得るように、是非ご協力を願いたいところである。このことは在来の地域中心の石仏調査を主とした出版を否定することにはならない。それらの在来の多くの出版物は、必ずしも全国を行脚し尽さなくとも、自分のテーマ解明のための好資料となるのであって、こうした視点の研究者の増加することは、在来の出版物への需要をも増大することにもなろう。要は頭打ちの出版傾向では、そのものの需要の増大も期し難いので、石仏調査の新しい活路に互いに協力し合うことにある。

（大護記）

15号 (1980.9)

巻頭言

石仏についての基礎的な知識を、最短距離で把握できる本は無いか、いろいろな石仏に対面して、これは何かということを簡単に見きわめるにはどうしたらよいか、ときどきこんな質問を受けて面くらうことがある。あんちょこばやりの世の中だから、そうしたあんちょこものがあればという気持は分らぬことはない。

そんな時、私は「とにかく数を見ることですよ。殊に近世以降の民間信仰の石神・石仏ともなると、極めて恣意的な、またローカル性の強いものがあるので、例えば庚申塔とは概ねこういう形のもので、信仰は一口に言えばこうですと簡単にきめきれないものがあります。見る前に言葉でそれを語ろうとすると、数万言を費しても言い尽せません。数を見ているうちに、またたそれぞれの地方で個人に信仰を聴いているうちに、だんだんと理解されてくるものです。それと併行して、数を見ることは勿論必要ですが。」と答えるだけである。随分無責任な放言のようであるが、私はそれが至上の方法であると考えている。

そうかと思うと、右の話を地で行ったような、いろいろな土地に出かけて、一つでも多くの石仏を、それも無差別にカメラに収めている人々もある。そんな人に接したとき、いったい何をこの人々は目的にして歩いておられるのかと、疑問を感ずる。ひたすら「ただ及ばざることを擢る」というふうにうつってくるからである。それが趣味ならそれも結構だが、何か意図的に石仏に求めるとするならば、こうしたことは徒労に終りかねまい。その結果は一時代前の郷土史家のように、単なる物識

りに陥ることになろう。ある程度石仏が分ってきたら、早く目的意識を確立する必要があろう。会員の中には、かなり自分の研究テーマを定めて、それに邁進する人が多くなったが、近年急に増加し出した若い人々に、殊にそれがはっきり現われている。例えば星敬・中島康夫の両君と先日話す機会があったが、両君は小川剛弘・三浦勲氏と共に相当の長年月を覚悟のうえで、全国の磨崖仏のリストを完成しようと意気込んでいる。健脚な若いうちから相当の年月を覚悟で取り組んでこそ、立派なライフワークとして、極めて有意義な仕事は完成するであろう。二人の意気に拍手を送るとともに、会員各位のご協力をお願したい。

こうした目的意識を確立した個人や、小グループが出てくることによって、協会内に目的意識毎の部会が誕生できるであろう。それも単に「庚申の研究グループ」、「道祖神研究グループ」というだけでは、少し漠然とし過ぎて、なかなか協力し合うことは困難であろう。あるいはそうした部会の中に、さらに目的別の班の編成を考えるのも、一つの方法であろう。

協会発足後、間もなく満四年を経過しようとしており、会員も全国に及んで八百名にのぼった今日、個人研究の限界線のはっきりしている石仏研究であるだけに、「協会」という組織力が新しい機能を発揮すべき時期に来ていると考えられる。機関誌『日本の石仏』の半分は、特集号とすることにしても、それにも限界がある。さらに進んで『日本の石仏』誌は、こうした分野にかなりの頁をさくべきものと考えている。予め協会でそれぞれの部会を設定して、部員を募る方法は、活力のない部会に堕する懼れがある。自主的に立ち上ったグループに、惜しみなき協力をするのが協会のあるべき姿であろう。

同好の士の集まりである「日本石仏協会」とはいえ、実に多目的な人々の集りである。かくすべしという規制は決してすべきことではないが、そうかといって無目的の協会になってはならない。奇数月に行なわれる「石仏旅行」も、珍らしいものを求めて、転々と各地を遍歴するだけでは、観光旅行社でおこなっている石仏旅行と同じものになってしまう。『日本の石仏』誌も、ただ漫然とした会員の「研究発表の場」であるだけでは、本来の「会の機関誌」としての役割を果しきったとは言えないであろう。「会員の広場」欄に、どしどしとこうしたことに関してのご意見を送っていただきたい。（大護記）

16号（1980.12）

巻頭言

日本石仏協会も、ここに満四年を迎えることになった。本誌も一六号をお届けすることになり、まあまあの成長振りであったと思う。ここまでくると、協会も本誌も一つの性格づくりが出来たと自認してよいような気がする。石仏研究ということで目的は共通していても、会員一人一人のねらいは様々であり、個性もまちまちであってみれば、今までの歩み方が、どなたにも満足できたと考えることはできないし、それを願うこと自体無理なことであろう。

会を結成した当時、果してこれからどんな会になるであろうか、発起人の一人として勿論意図するところはあったが、あくまで会員のための会であってみれば、皆様の志向が会の性格を決定していくことは予想したところである。しかしここまで歩んできてみて、一つの性格づけが出来たということは、もう早急に性格変換は出来ないということになろう。

一体、いままでに形成されてきた性格とは何であろうか、こう自問してみても、適確にそれを言葉で表現することはむずかしいが、会員一人ひとりは、一つのうけとり方をしていることも明らかである。

当初意図したことは、この会の名称のとおり、全国的に、あるいは地方地方に、多くの石仏研究のための会があり、また個人個人で行き方を模索している多くの同好の士の、一つの組織体として、お互い横の連絡をとりあって、まだ学的体系には程遠いこの道の、よちよち歩きを支えあい、いつの日にか学的体系を実現しようとすることにあった。今なお調査とその報告に

大方の人々が終始しているのが現状であるが、調査それ自体は目的ではなく、それを経て何を探り出そうとするのか、誰にもそのことは意識されているはずである。『日本の石仏』誌に何回か特集を組み、これからも組もうとするのは、類似の調査を通じてそこに問題点を捉え、その解決への道を摸索し、石仏研究の目的意識をはっきりさせようと意図したことにある。無論目的意識は人それぞれによって異なり、また異なるべきものであって、単一に、短兵急にかくあるべしと決めつけるべき筋合いのものではない。ただ思うらくは、調査自体に比重が片寄りすぎて、猟師山に入って山を見ずといったたとえに、お互いが陥らないように警戒し合いたいということである。

石仏を見ることは楽しい。石仏は自然の中にあって美しく、無性に人々の心を魅了する。その花園の中にあって、生きる楽しみを満喫すること、それ自体に目的があってもいささかも差支えはないであろう。じかしながら陽の光はうつろい易く、カッと西陽を受けて珠玉の如く照り映える石仏も、陽脚は意外に早く西に廻り、夕闇の中に沈んでしまうであろう。その西陽の下に捉え得た石仏は、何が故にかくも強く己の心を捉えたのか、沈思すれば人それぞれに心に沈澱したものがあるであろう。それを文字に、あるいはフィルムにとどめて、互いに提示し合う中に個人の情感を越えた共通のものがそこに見出されるであろう。それなしに一人で情感の灯をともし続けることはあまりに勿体なさすぎる。文学としての石仏、美術としての石仏、宗教感情としての石仏、それぞれは立派な客観性を帯びて、第三者に訴えることができるであろう。それを瞬間的な、個人的な情感として燃焼し終るだけでなく、それを客体として位置づけることによって、はじめて社会的な意味を持ってくる。石仏を通じて民族の心を捉える、これまたそれらにも劣らぬ意義のある仕事である。

『日本の石仏』誌は、それが写真であれ、文学であれ、民俗信仰であれ、表現の方法はいずれであってもよい。個人体験、個人の思考としてそれらを終わらせることなく、第三者に訴え、提示するための客観的作品として発表する会員の機関誌である。今まで美術として、文学としての作品提示が乏しかったことは、大いに反省されるべきことである。

（大護記）